



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

歴史の影に、光あり

幕末志士の母・野村望東尼①

＊福岡の偉人を訪ねて

私は数年前から、「和ごころ塾」という日本史や日本文化を学ぶ講座を開催してきました。その課外授業として、長州藩士・高杉晋作の足跡をたどるバスツアーを企画したのですが、その出発点として選んだのが「平尾山荘公園」（福岡市中央区）でした。

ここは幕末の勤皇家・野村望東尼が夫と死別後に住んだ場所ですが、そのことは、地元の人々にもあまり知られていません。

一例を挙げると、私は先日、この史跡からほど近い高校で講演をさせていただいたのですが、彼らはこの公園の清掃奉仕をしているながら、ほとんどの生徒が、望東尼がどんな人なのか知らないと言っています。

確かに、歴史の表舞台に彼女の名前が出てくることは多くありません。けれど彼女

の果たした役割が女性としてすばらしいと感じられるので、今回『れいろう』読者の皆様にご紹介したいと思います。

その平尾山荘ですが、実は、私はこここそが、明治維新の端緒を開いた場所、だろうと考えているんです。

一般的に、幕末維新史を回天させたとして語られるのは、高杉晋作による「功山寺の拳兵」です。黒船来航で幕府はすぐさま終焉を迎えたと理解される方が多いようですが、実際、ペリー来航から明治維新までには十五年かかっているんです。後に、倒幕一本槍となる長州藩でさえ、幕府の威光を恐れ、幕府協調派が藩政を握っていた時期があったんですから。

そんな幕府中心の政治システムに敢然と立ち向かったのが、維新の立役者の一人・高杉晋作だったんですね。「これより先、長州男児の肝っ玉をご覧に入れ申す」と高杉



野村望東尼（1806-1867）

幕末の歌人であり勤皇家。福岡藩士の夫と共に和歌と国学を学ぶ。夫と死別後は若い志士を多く助けた。現在の福岡市中央区に史跡（晩年の住居）がある。

【イメージイラスト】アオジマイコ